

床ずれ予防プログラム

医療関係者には褥瘡（じょくそう）と言えばわかるはずですが、一般市民の皆様はご存知でしょうか。それでは床ずれ（とこずれ）と言いかえればわかりますね。超高齢社会において在宅医療が進む中、床ずれは予防しなくてはならないものの一つです。

床ずれって何？

床（とこ）に就くと聞いて、元気な時ならとても気持ち良い時間を想像するでしょう。しかし、その床において体に傷ができてしまったら、とてもいやなことですね。その傷が床ずれです。傷が治るために肉体的な負担がかかり、重い細菌感染を来せば命に関わる可能性すらあります。予防するための努力、それが何より大切です。

アセスメントとは

物事の良し悪しを評価するアセスメントは、床ずれ対策に関して2種類あります。できてしまった床ずれの傷に対するアセスメントは、深さや大きさに加えて、肉芽や壊死の状態などを多角的に評価するため、専門職の眼が必要です。重度の床ずれは患者さんにもまわりの人たちにも苦痛を与え、多くの医療資源や社会資源を投入することになります。では、床ずれを作らなければよいのではないかと考えるでしょう。もう一つのアセスメントは、床ずれ発生につながる危険因子の評価です。

ケアプランに活かす

在宅において介護が必要になった時、ケアマネジャー（介護支援専門員）がケアプラン（介護サービス計画書）を作成しますが、そこに床ずれ予防の観点を盛り込んで欲しいのです。そのため、ケアマネジャーのために「床ずれ危険度チェック表」が開発されました（表）。平易な言葉で床ずれ発生の危険因子を評価して、在宅では4点以上でリスクありと判定されます。これをケアプランにうまく活かして欲しいのです。

床ずれ予防プログラム

では、床ずれ発生リスクありと評価された場合、ケアマネさんはどう動けばよいか、誰と連携すればよいか、それがわからなくては意味がありません。私が理事を務める日本褥瘡学会・在宅ケア推進協会とアルケア社が共同して会議を繰り返し、床ずれ予防プログラムを完成させました。現在、書籍となって発売中ですので、床ずれ対策に

関わる医療・介護従事者の皆様にご活用いただければ幸いです。【ケアプランが変わる！在宅介護が変わる！床ずれ予防プログラム-床ずれ危険度チェック表を活かす-：春恒社 880 円】

床ずれに自問自答

この書籍は今年の4月、桜の花びらそよぐ頃に仕上がりました。その序文を引用して稿を閉じます。～どう予防すれば良かったんだろう？できてしまった床ずれを目の前にして、そんな自問自答をされたことがあると思います。反省も大切ではありますが、そこにある傷、そして傷を持った生活に対して、医師は治療を考え、看護師はケアを考え、多職種で取り組んでいくために、ケアマネジャーは新たなケアプランを立てていかななくてはならないのです。それではどう連携していくのか、どう動けばよいのか、そんな課題に対して本書がきっとお役に立ちます～

項目		チェック
1	自分で寝返りがうてない	
2	痩せて、骨張っている	
3	足や腕の関節を伸ばすことが出来ない	
4	食事量（回数）が減った	
5	体が汗で湿っていることがある	
6	オムツを常時使用している	
7	足が浮腫んでいる	
8	ギャッチアップ機能を利用して体を起こしている	
合計		点

床ずれ危険度チェック表：森田貞子ほか（日本褥瘡学会誌 2019）

【副院長兼皮膚科診療部長 岡田 克之】

